

Lumbini ISSC

— 3年間の集大成 —

International Scientific Steering Committee – The compilation for 3 years –



7月3日(水)～5日(金)ルンビニでISSC(International scientific steering committee)が開催され、研究室からは黒瀬助教、傅特任研究員、M2児玉が参加しプレゼンを行いました。また翌々日7日(日)には、西村先生が記者会見を行われ、PJの3年間で振り返られました。

修士2年 児玉 千絵

日本政府からユネスコへ3年間の支援事業として企画されたルンビニPJも、この7月で最終年度が終了します。今回の訪問はその締め括りにふさわしい充実した訪問となりました。

ルンビニは丹下健三が作成したマスタープランに則って長年整備が続けられてきましたが、世界遺産登録後の観光客の急増やマスタープラン整備の遅れ等により遺跡の保全が困難となっていました。そこでユネスコが日本政府の援助を得て、新たな保全方針を模索するため西村先生をリーダーとした国際専門家チームを組織し、遺跡の化学的保存、考古学調査、保全計画の見直し、の3チームが活動を行なってきました。私



▲1: 200 模型写真—北側からアショカ・ピラーを望む

達ルンビニPJチームは、この内の保全計画の見直しに取り組み、今回の訪問で3年間の調査・分析から最終的な保全計画の提案を行いました。

プレゼンに際しては、新しいプロジェクトメンバーのM1 商・瀬川・高梨が中心となって製作した全長4mにも及ぶ1:200模型を持参し、不要な樹木の伐採として会議参加者に模型のかすみ草を抜いてもらうなど、模型をフル活用した参加型のプレゼンを行って効果的に提案を伝えることができました。また、会議終了後も自然と人々が模型の周りに集い意見交換をする姿も見られ、模型の持つ力をしみじみと実感することとなりました。

首都カトマンズでの記者会見では、3年間の支援事業の中で明らかとなった考古学的発見が発表され、西村先生からも丹下マスタープラン以降の整備状況と3年間の改善などがリリースされました。

これで1つの区切りはつきますが、今後もルンビニでの支援が続けられるよう関係者各位調整中です。これからもルンビニPJにご期待ください。



▲首都カトマンズでの記者会見



▲模型をつかってプレゼンを行う黒瀬先生

土木計画学委員会賞を受賞!

B4 Shibata Received Award of Competition!



学部4年 柴田 純花

6月1日、2日に土木計画学春大会内で行われた「第7回土木計画学公共政策デザインコンペ」に他研究室の修士2年生と2名で参加しました。このコンペは、社会環境における問題発見とその背景の熟考を経た上で、社会を改善するための公共政策を提案することを、対象地を問わず求めたものです。

私達は愛媛県松山市を対象とし、縮退の時代における「都市全体のためのまちなか」をテーマに、中心市街地全体の外部空間の提案を行いました。提案内では、郊外の発生による人の移動形態の変化と、城下町に端を発する中心市街地の空間構造の間に隔たりがあることを、縮退の時代を迎えるにあたる問題として指摘しています。

このような歴史と現状分析による問題発見から全体の空間提案につなげた点を評価され、土木計画学委員会賞を授賞しました。発表に向けた準備や当日のプレゼンとポスターセッションを経て、案を形として表現し伝えることの困難さと重要性を実感しました。



▲授賞後にパネルの前で記念撮影



▲ポスターセッションにて提案を説明中



▲土木計画学委員会賞を授賞しました

OB・OGめぐり第14弾！

The news from OB・OG of UD Lab. vol.14!

都市デザイン研究室のOB・OGの方々に、卒業後の仕事や活動に関して寄稿して頂く企画です。第14回目の今回は、平成17年に修了されたUR都市再生機構の大野友平さんです。

卒業後、独立行政法人都市再生機構（略称：UR都市機構）に勤めており、老朽化した団地の再生や都心部での再開発事業などを経験してきました。

現在は岩手県沿岸部の津波被災地で、災害公営住宅（家を失って自力再建も難しい仮設住宅にお住まいの方々向けの公営住宅）をつくる仕事をしています。陸前高田市、大船渡市を担当しており、設計・工事中から水面下の案件まで合わせて11地区380戸程度あります。

私の主な仕事は市との窓口で、社内の建築、土木、設備といった設計の各職種と調整しながら、プロジェクトの円滑な進捗を図っています。研究室在籍時にやっていた福島県喜多方市等のPJで経験した地元の方々とのコミュニケーションが仕事の基礎体力になっているなあと常々感じています。

仕事の立場上、基本的にはお金とスケジュールの心配をしていますが、地形模型を切ったり、住棟の配置検討をしたりと時々手を動かすこともあります。沿岸部は平地が少ないので、山を切ったり、あるいは浸水地を盛土して建設地の安全性を確保するため、住宅と言えど仕事上の会話では土木的な要素も大きく、新たな知識を求められることも多いです。

岩手は日本酒と魚介類が最高で、今は生ウニの季節です。ぜひ遊びに来てください！



▲先行的に嵩上げされた市街地の風景



▲陸前高田市の物件の模型


清水プロジェクト Shimizu-project

text_hagiwara

6月30日（日）より2日間行った現地調査では、市が積極的な利用を検討している、清水港線跡を利用した自転車道を対象に、周辺空間を含めた調査を行い、さらに様々な立場の方と意見交換を行いました。現状は利用者が使いやすい空間ではないですが、港と駅を繋ぐ動線として市民に親しまれる空間となるよう、検討を行いたいと思います。一方、これまでPJチームが目撃してきた日の出地区では、ウォーターフロントの活用可能性を検討するため、海沿いの県営上屋の調査を行いました。また昨年社会実験を行った石造倉庫群の重要性を今後さらに認知してもらうために、倉庫群を所有する企業や地元NPO、大学の方々と、今後の可能性について意見交換を行いました。港全体での位置づけや老朽化など様々な課題がありますが、地元の方とともに継続性のある活動を行えればと思います。



▲地元の方と自転車道を調査

▲海沿いの県営上屋を眺める


POPSプロジェクト POPS-project

交換留学生 Katarina Ringenson

Our latest POPS-survey day, we worried that the rain would keep POPS users indoors, which would hinder us collecting data on POPS use. But we decided to try! Walking from Tameike-sanno, we found both more and less successful POPS. One of the former, reachable by elevator, was frequented by old ladies, cats and construction workers with bento. Its popularity seemed partially dependant of the nearby beautiful shrine area.

Another was a secluded park hidden upstairs behind high-rise buildings, which made it harder to find but also acted as sound barriers for street sounds. And for me, they also provided an exotic fond.



▲ A hidden space

▲ Possible explanation



* 編集後記

原 由希子

はじめまして、編集委員になりました学部4年の原です。なぜ学部生がと思われと思いますが、現M1高梨くんの同期だったということで、ちょっと研究室の机をもらいマガジン編集委員をさせていただいております。昔から夏休みの宿題は7月30日から始めるタイプで、初めての編集も意気込んでいたもののギリギリになってしまいました汗。あっという間に7月になり、ジメジメ暑い日々ですが、熱中症には気をつけて乗り切りましょう！

7・8月の予定

Information

7月12日～14日	輛PJ現地調査
7月20日 15:00～	丹下先生ご生誕100周年記念シンポジウム @工学部1号館15号室
7月24日	M1 ジュリー
7月25日	M2 ジュリー